3. 調査にみる予防的な指導援助の現状と課題

この調査は，予防的な指導援助の要点と基本的対応を把握するため，児童生徒と教師を対象に実施したものである。

○ 調査対象者

- 児童生徒 3,569人（小学校5，6年 775人，中学校1～3年 2,209人，高等学校1～3年 585人）
- 教師　936人（小学校 493人，中学校 306人，高等学校 137人）

※ 図は調査内容の主なものを掲載

※ アンケート結果の分析を省略し，基本的対応の主なものだけを掲載

※ 数値はパーセント

(1) 児童生徒の問題行動に関する意識

① 問題行動につながる気持

反社会的行動につながる気持ち
（以下反社会的気持ち）
気分がムシャクシャして，おもしろくない。
誰れかにやつあたりするか，なにか悪いことがしたい。どうせ人は，悪いことをしているのだから。

非社会的行動につながる気持ち
（以下非社会的気持ち）
自分の気持ちを分かってくれる人はいない。
自分がとてもみじめに思え，とてもさみしく，つらい。

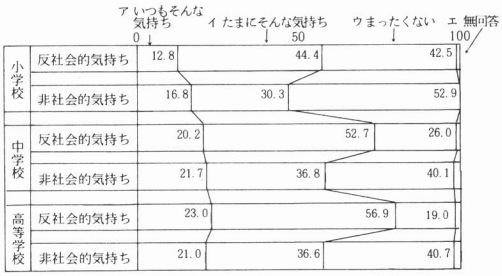

図1　問題行動につながる気持ち

問題行動につながる可能性があると思われる(ア)のいつもそんな気持ちになる児童生徒に対しては早急に指導援助する必要がある。また(ア)につながる可能性のある児童生徒(イ)に対しても目を向ける必要がある。まず，児童生徒の気持ちに気づくことが第一である。

② 問題行動につながる気持ちの背景

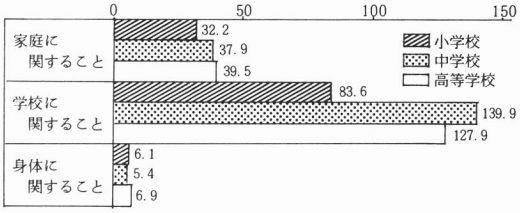

図2　家庭，学校，身体に関すること（複数回答）

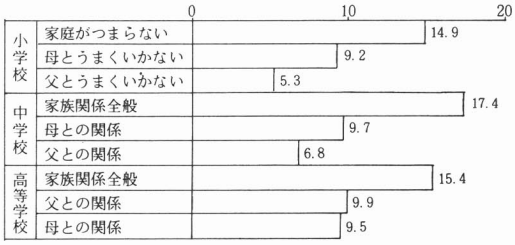

図3　家庭の状況に関すること（複数回答）

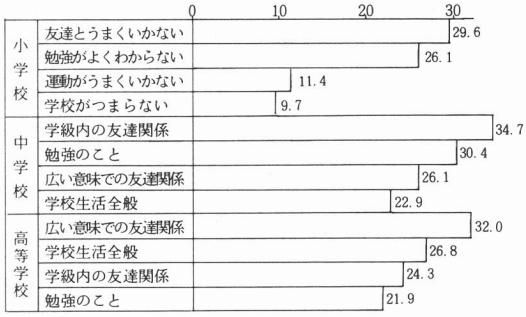

図4　学校の状況に関すること（複数回答）

問題行動につながる気持ちの背景については，図2から，学校に関する原因を詳細に把握する必要がある。

また，図3から，家庭に対しては，本人を含めた人間関係のあり方に指導援助の必要がある。

図4から，学校生活において，相互支持的な集団への調整が必要である。また，学業指導の工夫，小学校では個別的な運動の指導も必要である。

(2) 予防的な指導援助の内容

ここに示す指導援助の内容は，指導援助の結果問題行動に至らなかった例についての調査結果である。